

# 海外におけるフランス語学研究論文目録づくり

会津 洋（名誉教授）

かつて語学教育研究所（語研）図書室に収められていた洋雑誌は移管され現在、中央図書館3階の書棚に配架されている。昨年末の一日、私たちは関東周辺の大学の教員有志とともに日本フランス語学会の要請を受け、海外雑誌に掲載されているフランス語学論文の目録データを作成した。実は、このデータは知るひとぞ知る1967年この学会の機関誌『フランス語学研究』1号から掲載されている長寿ページ「海外雑誌論文目録」なのである。語研の語学関係海外雑誌の収蔵が群を抜いているという万人の注目により、有志の会員が毎年暮れに司書の協力を得て続行して来た作業であった。

思えば、38年前、いまは亡き理工学部河村正夫教授がひとり語研図書室の片隅に雑誌束を積み重ね、かたわらで奮闘しておられた事を思い出す。学外から獨協大の木下光一教授（当時一文非常勤講師）が来校、若手教員をリードし、しだいに作業も形をなしてきた。80年、90年代は急速に外国で博士号を得た俊英たちが増加し自分たちの研究上必要に駆られ、また学界全体の研究レベル向上を目指し、この作業は有用不可欠なものになっていった。

以前作業には7、8名で6時間を要したが、最近パソコン作業で効率化し同人数でも4時間に短縮された。一方前年度分ということで本庄分館から取り寄せたり、在架分で製本に出されるのを待ってもらったり図書館側の協力や了解を仰ぐ事も必要になった。

更に昨今は大阪大、京都大、筑波大に属する会員が目録作業の分担をしてくれ、早大での拾うべき雑誌の種類が軽減されたという事情もある。

私は1967年語研に着任して以来、微力ながらこの作業の世話をしてきたが、何と云っても語研図書室の収蔵誌の種類が豊かであることに秘かな自負を覚えて来た。「オタクにはほんとうに海外から多く雑誌を集めておられ感心しますよ」という声を寄せられたのも一再ではなかった。そしてこの“宝の山”も内外に情報開示されはじめて機能するものだから、われわれの地道な作業は欠かせない

ものだったのである。

それにしてもこの豊富な収集にはルーツがあった。1959年語学教育研究室発足当時、助手であった菅田茂昭氏（イタリア語、現在名誉教授）が購入雑誌リストを作成、室長の川本茂雄氏（一文、名誉教授、故人）とともに選定、さらに中国語関係は安藤彦太郎氏（政経、名誉教授）、古典語は古川晴風氏（元図書館長、故人）ほかにも諸言語教員の支えを得て収蔵誌コーパスを拡大して行ったのである。菅田氏は当時を回顧して「留学先として訪れたフィレンツェ大学で言語学誌の完備しているのに一驚し、帰国したら語研でも負けずに充実させようと奮起した。」と私に語ったことがある。さらにまた付け加えるならば、いったん購入を決めた雑誌は予算を削らず維持し、新着誌へも予算を与える措置を続けてきた事も大きいと言えるだろう。その結果、近着誌の雑誌目録作成という本題からはそれるが、主要誌のバックナンバー補充とか、貴重な雑誌の買い付けについても語研には各学部の語学教員で構成される図書委員会が置かれたので、タイミングよく購入決定がはかられたのであった。世界に知れた雑誌論文目録“Linguistic Bibliography”（Kluwer Academic Publishers）に比べると、収録範囲がフランス語学に限られるという弱点はあるものの、LBは4年前の分が収録刊行されるのに対し、われわれの目録作業は1年遅れでフォローしている点は誇ってもよく、この学会誌の購読者であるパリ在住のフランス人学者も調法していると言ってくれた事があった。

2001年に退職した私は図書館利用に何の支障もなく、いつもありがたく思っているが、学内外の若い研究のためにもこの目録作成作業に今後末長く役立ちたいと願っている。

例・『フランス語学研究』第39号（2005）より

Bulletin de la Société de Linguistique de Paris  
98-1 (03)

DEPECKER, L., Saussure et le concept, 53-100

SCHNEDECKER, C., *Quelques-uns "partiti"* : approche sémantico-référentielle, 197-227.

BERTHELOT-GUIET, K., Nom de marque et perception 'fautive' du discours publicitaire, 229-245.